

冬の寒さも和らぎ、吹く風にも春の訪れを感じられる季節となりました。本日は、私たち卒業生三百五十五名の出立に際し、このような盛大な式典を挙げていただき、誠にありがとうございます。

また、来賓の皆様、保護者の皆様におかれましては、ご多忙の中ご臨席を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

私たちは三年前、長良高校七十七期生として入学しました。新しい環境への大きな期待と不安を胸に、この長良高校の門をくぐった日のことを、今でも鮮明に覚えています。この校舎で過ごした三年間は、私たちにとって忘れることのできないかけがえのない時間となりました。

一年目の、まだ新しい環境に慣れない中でのリトルワールドへの遠足に始まり、文化祭、体育祭、修学旅行など、さまざまな行事を経験しました。それらの行事や、授業、部活動等を通して、「人と学ぶ」とはどのようなことなのかを少しずつ理解できたように思います。特に部活動を通して、その意味を深く実感しました。

私は兄の影響で幼い頃からサッカーを続けており、長良高校でもサッカー部に入部しました。私たちが入部した当時のサッカー部は、県大会で準優勝を果たすほどの強豪チームであり、練習についていくことは決して簡単ではありませんでした。

しかし、苦しい時にふと周りを見渡すと、常にそばに仲間がいました。私たちの代は、先輩方がインターハイを最後に引退されたため、約一年間、自分たちが中心となって部活動に取り組んできました。また、先輩方の引退後、怪我で離脱することの多かった私ですが背番号十を託していただき、チームを引っ張る立場となりました。

その中で、思うように結果が出ない日々が続き、「自分が何とかしなければならぬ」という思いが強くなり、次第に周りが見えなくなっていました。三年生になり受験を意識し始める中で、部活動最後の大会が近づくとつれ、精神的にも追い込まれ、サッカーをすることが苦しく感じることもありました。

そんなある日のミーティングで、チームメイトから「もっと周りを頼っていい」「信頼してくれてもいいんじゃないか」といった温かい言葉をもらいました。その時、自分の周りには支えてくれる仲間がこれほどまでにいるのだと気づき、自分一人で背負い込んでいたことが恥ずかしく感じられました。それからは、仲間とサッカーをする時間が楽しくて仕方ありませんでした。

時には意見が食い違うこともありましたがお互いの考えを受け止め合い、それを糧にすることで、個人としてもチームとしても成長できたと思います。高校生最後の大会で、岐阜県一位を決める試合のコートに立てたことは、決して忘れることのできない思い出です。

部活動を終えると、本格的に受験へと向き合う日々が始まりました。一、二年生の頃には休み時間に他愛もない話をしていた私たちも、次第に問題を出し合い、教え合うようになりました。周囲が進路について語る中で、自分が何を学びたいのか、将来どうなりたいのか分からず、悩む時期もありました。

しかし、仲間や先生方の話を聞く中で、自分の進むべき道が少しずつ明確になっていきました。辛い時に支えてくださった先生方、家族、そして長良高校の仲間には、感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

この三年間を通して、私は「人と学ぶ」ということの本当の意味を知りました。それは、同じ教室で同じ授業を受けることや、同じ部活動で同じ練習をすることだけではありません。自分の考えを相手に伝え、相手の考えに耳を傾け、それを自分の中に取り入れること。そして、自分には共に進んでくれる仲間がいるのだと認識することだと、私は考えます。

在校生の皆さん。これからの学校生活の中で、辛いと感じることや苦しいと感じることもあると思います。しかし、皆さんには共に歩んでくれる仲間がいます。そして、いつも支えてくださる先生方、家族がいます。ぜひ「人と学ぶ」ということを大切にし

てください。

私の好きな漫画に、人生を電車に例えた場面があります。

「ずっとみんな一緒なんてありえない。だから全て偶然なのだ。長い人生のほんの一駅、たまたま一緒に乗り合わせたただけなんだ。」

確かにその通りかもしれませんが。しかし私は、たとえ一瞬であったとしても、偶然であったとしても、この三年間を一生忘れることはありません。それほどまでに、長良高校で過ごした日々はかけがえのないものでした。

私たちは本日、この長良高校を卒業し、それぞれ未知の世界へと歩み出します。ここで身につけた「人と学ぶ」という姿勢を大切にしながら、未来を切り拓いていきたいと思えます。

最後に、長良高校のさらなる発展と、ここにお集まりの皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、答辞といたします。

令和八年三月一日 卒業生代表 田中 梨聖